様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月　３ 日現在

機関番号：３２６０１
研究種目：若手研究
研究期間：2019～2022
課題番号：１９Ｋ１３３２８

研究課題名（和文）中世後期足利一門大名・守護の基礎的研究

研究課題名（英文）Fundamental Research on Daimyo-Taimei and Shugo of Ashikaga Clan in the Late Middle Ages

研究代表者
谷口　雄太（Taniguchi, Yuta）

青山学院大学・文学部・准教授

研究者番号：８０７７９９３４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,100,000円

研究成果の概要（和文）：中世後期、足利氏の天下・体制の下で、その分身として都鄙（中央・地方）の支配に関与したのが「足利一門」の大名・守護である。本研究は、その関係史料（古文書・古記録・典籍類等）を網羅的・全国的に収集し、実証的・総合的に分析する作業を通して、これまで十分には検討されてこなかった足利一門大名・守護の具体的・基礎的な実態につき、事実関係を明らかにしようとするものであった。そこで得られた結果は①室町幕府の都鄙支配に関する全体的研究、および②足利氏・今川氏研究をはじめとする個別的研究に大別され、具体的には4年間で図書・論文・学会発表数40近くの成果を上げることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
近年の中世史研究において最も注目されているテーマの一つが室町幕府である。そうした幕府の全国支配において将軍足利氏の分身たる足利一門が決定的に重要な役割を果たしていたことは既に指摘されて久しい。特に、中央では「大名」として幕政に参与するとともに、地方では「守護」として地域支配を担当した有力な一門（ここでは「足利一門大名・守護」と呼称する）は室町幕府の列島統治を考える上で不可欠の存在である。それゆえ、足利一門大名・守護については一定の研究蓄積が存在しているが、なお個別・全体のいずれにおいても研究不足が看取された。そこで、本研究では足利一門大名・守護研究を推進し、中世史研究を深化させることに努めた。

研究成果の概要（英文）：In the late Middle Ages, under the Ashikaga clan's rule and system, the "Ashikaga Ichimon" lords and guardians were involved in the control of the capital and the provinces (central and local) as their alter egos. This study was an attempt to clarify the specific and basic facts of the Ashikaga feudal lords and guardians, which had not been fully examined until now, by collecting historical documents (old documents, old chronicles, and classic books) from all over Japan and analyzing them empirically and comprehensively. The results obtained can be roughly divided into (1) overall research on the Muromachi Shogunate's rule in the capital and the provinces and (2) individual research, including research on the Ashikaga and Imagawa clans, and in four years we have produced nearly 40 books, papers, and conference presentations.

研究分野：日本中世史

キーワード：中世後期　足利一門　大名　守護　武家の王　足利氏　分裂　統合

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

近年の日本中世史研究において最も注目されているテーマのひとつが、室町幕府である。そうした幕府の全国支配において、将軍足利氏の分身である足利一門が決定的に重要な役割を果たしていたことは、既に指摘されて久しい（佐藤進一『南北朝の動乱』中央公論社、1965 年）。特に、中央（都）では「大名」（タイメイ・ダイミョウ）として幕政に参与するとともに、地方（鄙）では「守護」（シュゴ）として地域支配を担当した有力な一門（ここでは「足利一門大名・守護」と呼称する）は、室町幕府の列島統治を考えるうえで不可欠の存在である。それゆえ、こうした足利一門大名・守護については、たとえば小川信が三管領の細川氏・畠山氏・斯波氏を取り上げ（『足利一門守護発展史の研究』吉川弘文館、1980 年）、また最近では河村昭一が四職の一色氏を検討し（『南北朝・室町期一色氏の権力構造』戎光祥出版、2016 年）、市川裕士が同じく四職の山名氏を整理するなど（『山陰山名氏』戎光祥出版、2018 年）、注目すべき成果が蓄積されている。だが、その一方で、例えば今川氏など研究の立ち遅れている足利一門大名・守護も少なくない。そのうえ、足利一門の定義自体が直近大幅に見直され、非足利一門（足利一門ではない）と見做され続けてきた新田一族（源義国―義重流）や吉見氏（源為義―義朝流）も、中世に確実に足利一門であったことが判明し、検討の対象とすべき一門は想像以上に多数存在したことが分かってきた（谷口雄太「足利一門再考」『史学雑誌』122 編 12 号、2013 年）。よって、新たに確立した足利一門の定義（「源義国流」と「源為義―義朝流」）に基づいて、一門大名・守護研究を着実に進めることで、室町幕府研究をより一層精緻に発展させていくことができると考える。

２．研究の目的

第一に、個別研究の蓄積である。足利一門のなかでも、たとえば今川氏など研究の手薄な一族は少なからず存在している。そうした一門を列島横断的・集中的に検討することによって、個別具体的な事実関係をまずは明らかにする。そのうえで第二に、総体研究の深化である。室町幕府は足利氏・一門が中心となって構成されており、在京・在国をめぐる状況など、近年その研究は大幅に進んだ。本研究でも、個別具体的な事例検討（各論）をふまえながら、それにとどまらず全体像（総論）の構築をも意識して分析を行っていく。そして第三に、南北朝・室町・戦国期という時期の接続である。従来、足利氏・足利一門は時期を区切って分析されることが多かったが、それだと見逃される事実が少なくない。たとえば戦国期だけに特化して研究をしていると、その歴史的前提としての室町期、さらには南北朝期が視野から外れやすくなるが、そのような欠点を補うううえでも、中世後期全体を通して、比較的長いスパンで、足利氏・一門研究を進めていく。

３．研究の方法

歴史学の王道として、実証主義の方法をとる。具体的には、史資料の網羅的収集と分析である。関係史料（古文書・古記録・典籍類）を史料集・自治体史などから悉皆的に集め、それを時系列に沿って並べて検討するのである。同時に、可能な限り原本や写真にあたって、文字を確認する。これについては資料館や図書館、神社仏閣などでの現地調査が必須となるが、デジタル化され、インターネット上で原本や写真の閲覧が可能なものも最近は少なくない。かかる恩恵に最大限預かりつつも、現場に足を運ぶことも厭わず行うつもりである。とりわけ本研究では地域的には列島全体、時期的にも中世後期（南北朝・室町・戦国期）と対象を広くとっているので、労力はかかろうが、得られる成果は確実に新知見となるはずなので、時間が許す限り丁寧に行っていく。

４．研究成果

第一に、全体にかかわるものとして、①『中世足利氏の血統と権威』（吉川弘文館）、②『〈武家の王〉足利氏』（吉川弘文館）、③『足利将軍と御三家』（吉川弘文館）、④『室町期東国武家の「在鎌倉」』（鎌倉考古学研究所）、⑤『分裂と統合で読む日本中世史』（山川出版社）、⑥『鎌倉幕府と室町幕府』（共著、光文社）を上梓し、⑦「近年の「室町・戦国期『幕府―守護体制論』」論に学ぶ」（中世後期守護研究会）、⑧「柳田国男の「都鄙雅俗」論をめぐって」（国際日本文化研究センター）、⑨「21 世紀における日本中世史研究の動向と民俗学」（田園都市線沿線談話会）、⑩「日本中世史研究の潮流と青学史学」（史学科フォーラム）を報告した。①は本研究の指針となるもので、博士論文をベースに増補修正を加えたもの。②③はそれをふまえて、新知見も加筆しながら一般書としたもの。なお、②の補遺として「「武家の王」と「逃げ上手の若君」」（『本郷』155 号）、③の補遺として「足利御三家の足跡を探して」（『本郷』163 号）を認めた。④は室町期の東国武士に焦点をあて、「首都」鎌倉への求心力（在鎌倉）の実態を追ったもの。⑤は足利氏・足利一門研究、在京・在鎌倉研究もふまえつつ、中世社会を分裂・統合の両側面から論じたもの。⑥は山田徹・木下竜馬・川口成人三者と最新の中世史研究・理解について相互に論じあったもの。⑦は室町幕府の都鄙支配につき、川岡勉の学説・理論を批判的に発展させようとしたもの。⑧は近年中世史研究で注目されている「都鄙雅俗」の概念について、提唱者・柳田国男にまで遡ってその思考の内容と受容の歴史を検討したもの。⑨⑩は民俗学・考古学・東洋史・西洋史の研究者と、21 世紀、網野善彦以後の中世史研究の状況を議論し、各分野との接続を図ったものである。なお、「Hoyu Academia 私の原点」（『邦友プロムナード』51 号）も認め、中高の母校に寄与した。

第二に、個別にかかわるものとして、足利氏関係では①「足利直冬の上洛・没落と石塔・桃井・山名・斯波」(『アジア遊学』263 号)、②「「危機の応永三十年」における九州勢の関東出陣計画」(『室町遺文関東編月報』3 号)、③「足利持氏願文は「血書」か」(『鎌倉』127 号)、④「享徳の乱」(『戦乱と政変の室町時代』柏書房)、⑤「足利政氏の妻と子女」(『足利成氏・政氏』戎光祥出版)、⑥「足利高基の妻と子女」(『足利高基・晴氏』戎光祥出版)を執筆した。①は京都足利直冬の上洛戦をめぐる状況を、『三国伝記』・『太平記』・一次史料の比較を通して検討したもの。②は京都足利義持が、応永三十年(1423)の対鎌倉府政策において、九州と奥羽(全国)の軍勢をも動員しようとしていた事実を明らかにしたもの。③は関東足利持氏が鎌倉鶴岡八幡宮に納めた願文につき、近代以降「血書」といわれてきた言説そのものを分析対象とすることによって、かかる言説には根拠がなく、むしろ近世には「朱書」といわれており、それが妥当であることを指摘し、常識の盲点を突いたもの。④は関東足利成氏が戦った享徳の乱につき、その経過を解説したもの。⑤⑥は関東足利政氏・関東足利高基の妻と子女について、それぞれ検討した基礎研究。なお、京都足利氏・室町幕府関連では「足利氏はなぜ特別な存在になれたのか」(『歴史地理教育』931 号)、「書評 小久保嘉紀著『室町・戦国期儀礼秩序の研究』」(『年報中世史研究』47 号)、「書評 海上知明著『戦略で読み解く日本合戦史』」(『週刊読書人』3305 号)、関東足利氏・鎌倉府関連では「身分秩序」(『図説鎌倉府』戎光祥出版)、「書評 市村高男著『足利成氏の生涯』」(『週刊読書人』3464 号)、「新刊紹介 江田郁夫編『中世宇都宮氏』、江田郁夫・簗瀬大輔編『中世の北関東と京都』」(『史学雑誌』129 編 9 号)も認め、書評や新刊紹介、一般向け記事の執筆に努めた。

第三に、個別にかかわるものとして、足利一門関係では①「駿河今川氏の発給文書」(『鎌倉府発給文書の研究』戎光祥出版)、②「吉良貞義・満義・貞家」・「石橋和義」・「斯波高経・義将」(『南北朝武将列伝(北朝編)』戎光祥出版)、③「新田義貞」・「新田義顕・義興・義宗」・「新田嫡流を支えた脇屋義助・義治」(『南北朝武将列伝(南朝編)』戎光祥出版)、④「新田義貞は、足利尊氏と並ぶ「源家嫡流」だったのか」(『南朝研究の最前線』朝日新聞出版)、⑤「義貞の尊氏への下剋上」(『南北タイムズ』3 号)、⑥「越前藤島の戦い」(『南北朝の動乱』星海社)、⑦「「太平記史観」をとらえる」(『古典の未来学』文学通信)、⑧「幻の「六分の一殿」」(『日本歴史』867 号)、⑨「里見氏研究の現在と未来」(『里見氏研究』1 号)を執筆した。①は駿河今川氏発給文書を一覧化したもの。現行の古文書学での用語法と当時の使用法とのズレについても指摘した。②は吉良氏・石橋氏・斯波氏について叙述したもの。なお、三河吉良氏については『新編西尾市史』(愛知県西尾市)資料編・通史編の編纂にも関与し、史料収集と執筆に従事した。また、「遠州飯尾氏は「両属」国衆か」(『静岡県地域史研究』12 号別冊)では、遠江飯尾氏が吉良氏から離脱したのちも、今川氏―吉良氏の両属国衆であったなどとする近年の「議論」を、史料の誤読から生じた誤謬と一蹴した。③④⑤⑥⑦は新田氏が足利一門であることを実証・再確認し、その動向を跡づけたもの。新田氏は従来「非足利一門」とされてきたが、かかる認識は「太平記史観」の産物にすぎず、中世にははじめから明確に「足利一門」であったことを論証して、常識に再考を迫り、諸説を徹底批判した。⑧は足利一門山名氏の「六分の一殿」言説が近世以降の話にすぎず、中世段階でかかる言説は現状確認できないこと、室町幕府の直接支配圏(室町殿御分国 45 か国)からすると、山名氏はむしろ「四分の一殿」ともいうべき存在であることを指摘したもの。⑨は足利一門里見氏をめぐる研究史を整理したもの。こうした新田氏・山名氏・里見氏は、いずれも足利一門(源義重流)であり、本研究ではかかる勢力を明確に足利一門と論じることで、従来の研究状況・理解を刷新することに一定の成功をなしえたものと考える。なお、「甲斐足利氏の対足利氏観」(『説話の形成と周縁(中近世篇)』臨川書店)では、非足利一門たる甲斐武田氏が、足利氏をどう認識していたか検討し、源義家・義光の兄弟性をアピールしていた事実を指摘した。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計14件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 谷口雄太	４．巻 1
２．論文標題 里見氏研究の現在と未来 ー学界の現状をふまえてー	５．発行年 2022年
３．雑誌名 里見氏研究	６．最初と最後の頁 3-18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 谷口雄太	４．巻 163
２．論文標題 足利御三家の足跡を探して	５．発行年 2023年
３．雑誌名 本郷	６．最初と最後の頁 5-7
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 谷口雄太	４．巻 3464
２．論文標題 書評 市村高男著『足利成氏の生涯』	５．発行年 2022年
３．雑誌名 週刊読書人	６．最初と最後の頁 3-3
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 谷口雄太	４．巻 12別冊
２．論文標題 遠州飯尾氏は「両属」国衆か ー糟谷幸裕氏の近業に接してー＊再録	５．発行年 2022年
３．雑誌名 静岡県地域史研究	６．最初と最後の頁 149-149
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 谷口雄太	4．巻 47
2．論文標題 書評 小久保嘉紀著『室町・戦国期儀礼秩序の研究』	5．発行年 2022年
3．雑誌名 年報中世史研究	6．最初と最後の頁 151-161
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 谷口雄太	4．巻 931
2．論文標題 足利氏はなぜ特別な存在になれたのか	5．発行年 2021年
3．雑誌名 歴史地理教育	6．最初と最後の頁 16-21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 谷口雄太	4．巻 155
2．論文標題 「武家の王」と「逃げ上手の若君」	5．発行年 2021年
3．雑誌名 本郷	6．最初と最後の頁 14-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 谷口雄太	4．巻 51
2．論文標題 Hoyu Academia 私の原点	5．発行年 2021年
3．雑誌名 邦友プロムナード	6．最初と最後の頁 26-27
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 谷口雄太	4．巻 867
2．論文標題 幻の「六分の一殿」 ー山名氏にまつわる言説の検証ー	5．発行年 2020年
3．雑誌名 日本歴史	6．最初と最後の頁 57-63
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 谷口雄太	4．巻 3
2．論文標題 「危機の応永三十年」における九州勢の関東出陣計画	5．発行年 2020年
3．雑誌名 室町遺文関東編月報	6．最初と最後の頁 4-6
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 谷口雄太	4．巻 129-9
2．論文標題 新刊紹介 江田郁夫編『中世宇都宮氏』、江田郁夫・簗瀬大輔編『中世の北関東と京都』	5．発行年 2020年
3．雑誌名 史学雑誌	6．最初と最後の頁 85-87
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 谷口雄太	4．巻 3
2．論文標題 義貞の尊氏への下剋上	5．発行年 2020年
3．雑誌名 南北タイムズ	6．最初と最後の頁 7-7
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 谷口雄太	4．巻 3305
2．論文標題 書評 海上知明著『戦略で読み解く日本合戦史』	5．発行年 2019年
3．雑誌名 週刊読書人	6．最初と最後の頁 4-4
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 谷口雄太	4．巻 127
2．論文標題 足利持氏願文は「血書」か	5．発行年 2020年
3．雑誌名 鎌倉	6．最初と最後の頁 93-94
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計7件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 谷口雄太
2．発表標題 日本中世史研究の潮流と青学史学
3．学会等名 史学科フォーラム（青山学院大学）
4．発表年 2023年

1．発表者名 谷口雄太
2．発表標題 柳田国男の「都鄙雅俗」論をめぐって ー近年の日本中世史研究の状況からー
3．学会等名 国際日本文化研究センター共同研究会（第2回研究会）
4．発表年 2022年

１．発表者名 谷口雄太
２．発表標題 21世紀における日本中世史研究の動向と民俗学
３．学会等名 田園都市線沿線談話会（第20回研究会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 谷口雄太
２．発表標題 足利直冬の上洛・没落と石塔・桃井・山名・斯波 ー『三国伝記』が描いたもの・描かなかったものー
３．学会等名 国際日本文化研究センター共同研究会（第8回研究会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 谷口雄太
２．発表標題 室町期東国武家の「在鎌倉」ー屋敷地・菩提寺の分析を中心にー
３．学会等名 鎌倉考古学研究所（第8期大三輪龍彦研究基金研究報告会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 谷口雄太
２．発表標題 里見氏研究の現在と未来
３．学会等名 里見氏研究会（発足及び第1回研究会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 谷口雄太
２．発表標題 近年の「室町・戦国期『幕府ー守護体制論』」論に学ぶ
３．学会等名 中世後期守護研究会（2019年度第1回研究会）
４．発表年 2019年

〔図書〕　計19件

１．著者名 小助川元太・橋本正俊編	４．発行年 2021年
２．出版社 勉誠出版	５．総ページ数 240
３．書名 室町前期の文化・社会・宗教 ー三国伝記を読みとくー（執筆箇所は「足利直冬の上洛・没落と石塔・桃井・山名・斯波 ー『三国伝記』が描いたもの・描かなかったものー」（pp.40-45））	

１．著者名 亀田俊和・杉山一弥編	４．発行年 2021年
２．出版社 戎光祥出版	５．総ページ数 454
３．書名 南北朝武将列伝 ー北朝編ー（執筆箇所は「吉良貞義・満義・貞家 ー尊氏に蹶起を促した一門の長老ー、石橋和義 ー栄光と挫折を一身に味わった一門の名門ー、斯波高経・義将 ー室町幕府重職・三管領家筆頭への道ー」（pp.114-124、246-264））	

１．著者名 渡邊大門編	４．発行年 2022年
２．出版社 星海社	５．総ページ数 286
３．書名 南北朝の動乱 ー主要合戦全録ー（執筆箇所は「越前藤島の戦い ー新田義貞の敗死ー」（pp.131-147））	

1．著者名 渡邊大門編	4．発行年 2021年
2．出版社 柏書房	5．総ページ数 276
3．書名 戦乱と政変の室町時代（執筆箇所は「享徳の乱 ー開かれた戦国期への扉、関東を分断した「三十年戦争」ー」（pp.173-187））	

1．著者名 亀田俊和・生駒孝臣編	4．発行年 2021年
2．出版社 戎光祥出版	5．総ページ数 416
3．書名 南北朝武将列伝 ー南朝編ー（執筆箇所は「新田義貞 ー運命を決めた三つの選択ー、新田義顕・義興・義宗 ー義貞の恐るべき子どもたちー、新田嫡流を支えた脇屋義助・義治」（pp.151-178））	

1．著者名 呉座勇一編	4．発行年 2020年
2．出版社 朝日新聞出版	5．総ページ数 352
3．書名 南朝研究の最前線 ーここまでわかった「建武政権」から後南朝までー（執筆箇所は「新田氏と南朝 ー新田義貞は、足利尊氏と並ぶ「源家嫡流」だったのか？ー」（pp.132-151））	

1．著者名 荒木浩編	4．発行年 2020年
2．出版社 文学通信	5．総ページ数 872
3．書名 古典の未来学 ーProjecting Classicismー（執筆箇所は「「太平記史観」をとらえる」（pp.689-710））	

１．著者名 倉本一宏・小峯和明・古橋信孝編	４．発行年 2019年
２．出版社 臨川書店	５．総ページ数 304
３．書名 説話の形成と周縁 ー中近世篇ー（執筆箇所は「甲斐武田氏の対足利氏観」（pp.163-179））	

１．著者名 杉山一弥編	４．発行年 2019年
２．出版社 戎光祥出版	５．総ページ数 159
３．書名 図説鎌倉府 ー構造・権力・合戦ー（執筆箇所は「身分秩序」（pp.76-79））	

１．著者名 黒田基樹編	４．発行年 2020年
２．出版社 戎光祥出版	５．総ページ数 476
３．書名 鎌倉府発給文書の研究（執筆箇所は「駿河今川氏の発給文書」（pp.278-306））	

１．著者名 黒田基樹編	４．発行年 2023年
２．出版社 戎光祥出版	５．総ページ数 312
３．書名 足利高基・晴氏（執筆箇所は「足利高基の妻と子女」（pp.141-144））	

１．著者名 黒田基樹編	４．発行年 2022年
２．出版社 戎光祥出版	５．総ページ数 406
３．書名 足利成氏・政氏（執筆箇所は「足利政氏の妻と子女」（pp.338-343））	

１．著者名 谷口雄太	４．発行年 2022年
２．出版社 吉川弘文館	５．総ページ数 220
３．書名 足利将軍と御三家 ー吉良・石橋・渋川氏ー	

１．著者名 谷口雄太	４．発行年 2021年
２．出版社 吉川弘文館	５．総ページ数 192
３．書名 〈武家の王〉足利氏 ー戦国大名と足利的秩序ー	

１．著者名 谷口雄太	４．発行年 2021年
２．出版社 山川出版社	５．総ページ数 240
３．書名 分裂と統合で読む日本中世史	

1．著者名 山田徹・谷口雄太・木下竜馬・川口成人	4．発行年 2022年
2．出版社 光文社	5．総ページ数 256
3．書名 鎌倉幕府と室町幕府 ー最新研究でわかった実像ー	

1．著者名 谷口雄太	4．発行年 2020年
2．出版社 鎌倉考古学研究所	5．総ページ数 17
3．書名 室町期東国武家の「在鎌倉」 ー屋敷地・菩提寺の分析を中心にー	

1．著者名 谷口雄太（編集委員）	4．発行年 2020年
2．出版社 西尾市	5．総ページ数 760
3．書名 新編西尾市史 ー資料編2古代・中世ー	

1．著者名 谷口雄太	4．発行年 2019年
2．出版社 吉川弘文館	5．総ページ数 350
3．書名 中世足利氏の血統と権威	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関